

技術・経営の指導（酪農家における生産獣医療の取組事例）

- 獣医師が、生産性向上を求める農場に対して定期巡回を行い、過肥牛の増加及び平均搾乳日数の長期化といった課題を確認。牛の泌乳ステージごとの栄養状態、乳量等の推移を踏まえ、飼料の栄養濃度を引下げ。
- 取組の結果、乳量は維持しつつ飼料費を低減し、4ヵ月間で約40万円の収益増（前年比）を実現。

農場情報

- ・ 酪農家（搾乳牛30頭）
- ・ フリーストール牛舎
- ・ 全泌乳ステージで同一のTMRを給餌
- ・ 個体平均乳量28.9kg

※ TMR：牧草等の粗飼料、とうもろこし等の濃厚飼料、ビタミン等の添加物等をバランス良く混合した飼料

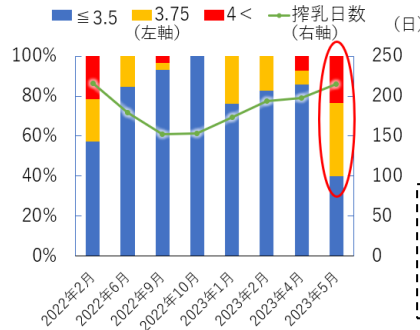


第1期改善施策

- BCS、RFS、個体平均乳量等をモニタリング

〔 ※ BCS（ボディコンディションスコア）は牛のエネルギー状態の指標
※ RFS（ルーメンフィルスコア）は牛の第一胃の充満度の指標 〕

＜BCS割合及び平均搾乳日数の推移＞



- ・ BCS 3.75以上の過肥牛が60%
- ・ 平均搾乳日数215日

※ 搾乳日数は、搾乳牛の産後経過日数（乾乳牛は計算に含まない）

要因分析

【過肥の要因】
乳量の少ない泌乳後期の牛が多い牛群構成に対し栄養濃度の過大な飼料を給餌

- TMRの濃厚飼料成分を1kg/頭・日引下げ

	前年同期	施策後
正味エネルギー可能乳量	34.9kg	33.0kg
代謝蛋白可能乳量	35.3kg	32.5kg

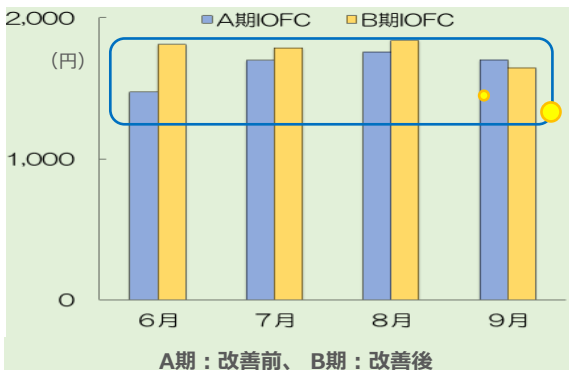
取組結果

○ IOFC(乳代-飼料費)の前年比

	前年同期	施策後	前年比
個体平均日乳量 (Kg)	28.9	29.2	+0.3
乳価 (円/Kg)	125	125	±0
1頭 乳代 (円/日)	3,612	3,650	+38
1頭 飼料費 (円/日)	1,953	1,879	-74
1頭 IOFC (円/日)	1,659	1,771	+112
1頭 IOFC (円/4ヵ月)	202,398	216,062	+13,664
農場 IOFC (円/4ヵ月)	6,071,940	6,481,860	+409,920

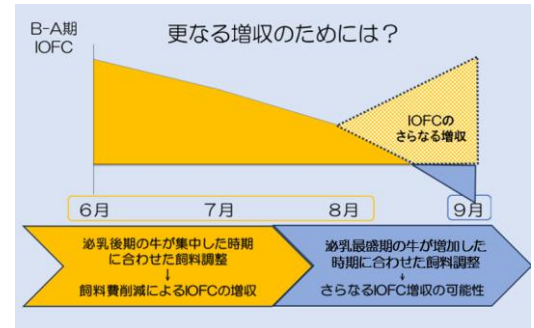
4ヵ月間で約40万円の収益増

○ 1頭当たり日額IOFC(乳代-飼料費)の前年同月比



【参考】第2期改善施策の検討

今後、牛群構成の変化（泌乳最盛期の牛の増加）に応じた飼料変更及び繁殖障害の治療を通じた搾乳日数の短縮により、更なる収益を得られる可能性



【残された課題】

- ・ 泌乳最盛期の牛が増加した 9月のIOFCが前年より低い
- ・ 平均搾乳日数の長期化

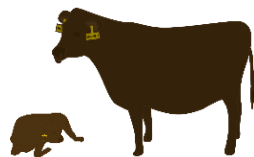
技術・経営の指導（肉用牛農家における生産獣医療の取組事例）

- 獣医師が、生産性向上を求める農場に対して定期巡回を行い、繁殖成績や子牛事故に係る課題を確認。
- 産褥期の管理方法の変更、初回授精月齢の後倒し、繁殖牛への呼吸器病ワクチン接種等の改善施策を実施し、空胎日数の短縮及び子牛の事故の低減を実現。

農場情報

- ・ 肉用牛繁殖肥育一貫経営農家（繁殖380頭、1産取肥育120頭、肥育600頭）、従事者11名
- ・ 分娩の初産割合25%、全頭分娩誘起処置
- ・ 繁殖成績（JMR20超）
- ・ 子牛事故率（10%）

注）JMR(Jours Moyen Retard)は牛群の受胎の遅延度合の指標であり、空胎期間のうち生理的空胎期間の40日を超えている日数の平均値。



改善施策

➤ 繁殖牛の課題：繁殖成績の向上

産褥期の飼養環境の適正化

つなぎ飼いかから2頭ずつの牛房管理に変更し、敷料の追加により衛生状態を改善するとともに自由運動の増加により発情行動を励起

➤ 子牛の課題：事故の低減

①分娩牛の体格の確保

子牛の平均出生時体重を踏まえ、初回授精月齢を12ヵ月齢から14ヵ月齢程度へ後倒すことにより、難産リスクを低減

②胎子の十分な発育

①に合わせて妊娠末期の増飼いを指導し、丈夫な子牛を産生

③子牛の免疫力向上

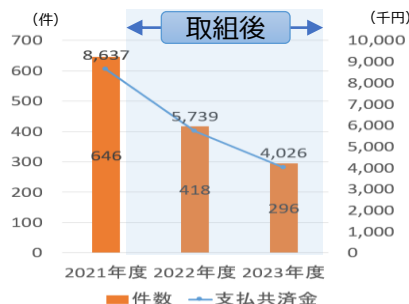
繁殖牛へ呼吸器病ワクチンを接種して初乳中の抗体価を高めるとともに、母子分離を3日齢から7日齢へ変更して総初乳摂取量を増やすことにより、十分な移行抗体を付与

取組結果

病傷事故の低減

繁殖牛

＜病傷事故の発生状況＞

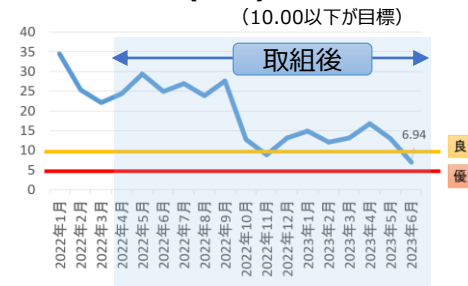


【病傷】うち子宮内膜炎：141件→60件

空胎日数の短縮

繁殖牛

＜繁殖指標(JMR)の推移＞



【繁殖】JMR：20超→6.94

病傷事故の低減

子牛

＜病傷事故の発生状況＞

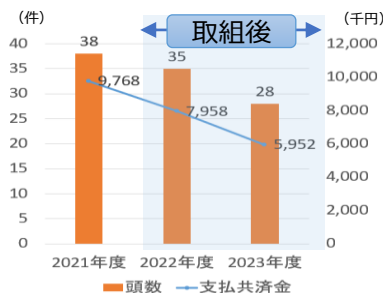


【病傷】うち呼吸器病：243件→222件
うち消化器病：242件→174件

死廃事故の低減

子牛

＜死廃事故の発生状況＞



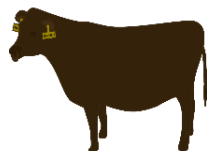
【死廃】事故率：10%→7%

技術・経営の指導(肉用牛農家における経営分析の活用事例)

- 経営診断の受診により経営状況を明確に知り、事故率の改善と肥育成績向上に取り組み、所得を向上
- 従業員への指導を工夫して異常牛の早期発見・早期治療を実践し、事故率を低減
- 血統やこれまでの肥育結果データに基づきもと牛を導入、1頭ごとの収益を管理・検証し、肥育成績を向上

農場情報

- ・ 肥育農家（肉専用種720頭）
- ・ 家族労働力4名、常時雇用2名、パート7名
- ・ 飼料作付（H30～）
 - 牧草 52 ha
 - 稲WCS 16 ha
 - 稲わら収集 60 ha



経営診断の受診

- H12就農、H22に父親から経営移譲。
- 経営状況が芳しくなかったため、H23から県畜産協会の経営診断を受診

経営分析結果の数値から・・・
✓ 他の農家より死亡事故が多く、その損失が大きい
✓ 負債残高が増加している



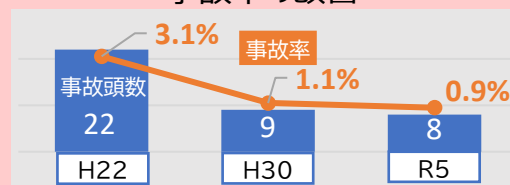
経営内容を数字で見て衝撃！
経営のいたるところに所得ロスにつながる要因がある！

事故率改善・肥育成績向上に向けた取組と効果

○従業員への飼養管理技術教育

- 飼養管理マニュアルを作成し、飼料調整や牛の健康確認等を指導
- 従業員の意識改革のため、
 - ✓ 毎日、肥育牛の状態や出荷牛の枝肉成績等を情報共有
 - ✓ 試食会開催、共励会入賞牛の枝肉の確認

事故率の改善



○データに基づく経営管理

- 出荷成績等のデータに基づいても牛1頭ごとに出荷時の販売価格を予想し、導入価格を設定
- 想定と異なる販売結果の場合は、飼養管理を見直しながら検証、次につなげる
- 収益目標には一定の損失を見込み、経営のリスク管理

○飼料価格高騰への対応

- 稲わら収集、牧草サイレージ、稲WCSの増産
- 大口契約であることを活かし購入飼料費を節減
- 前もって資金計画を立て、複数の融資機関に相談しながら有利な資金を選択

近年の肥育成績

	R2	R3	R4	R5
出荷頭数(頭)	419	427	435	505
枝肉販売価格(円)	1,166,560	1,353,130	1,383,256	1,373,192
5等級率(%)	52.3	60.7	72.4	83.8
1日増加額(円/日)	722	1,052	1,118	1,114
事故頭数、事故率	7頭、1.0%	6頭、0.8%	8頭、1.0%	8頭、0.9%

経営内容を数字で見て衝撃を受け、意識を変えざるを得なかった。あのと経営診断を受けたから今の自分がある。



労働力不足対応